



【写真上】寝姿山から見渡せる下田湾と伊豆諸島。写っている島は左から利島、鵜渡根、新島、式根島、神津島。右端の白い大きな建物は下田海上保安部の庁舎。前の崖壁には、下田、神津島、新島、利島、下田航路を運航する神新汽船のフェリー「あせりあ」が停泊している。

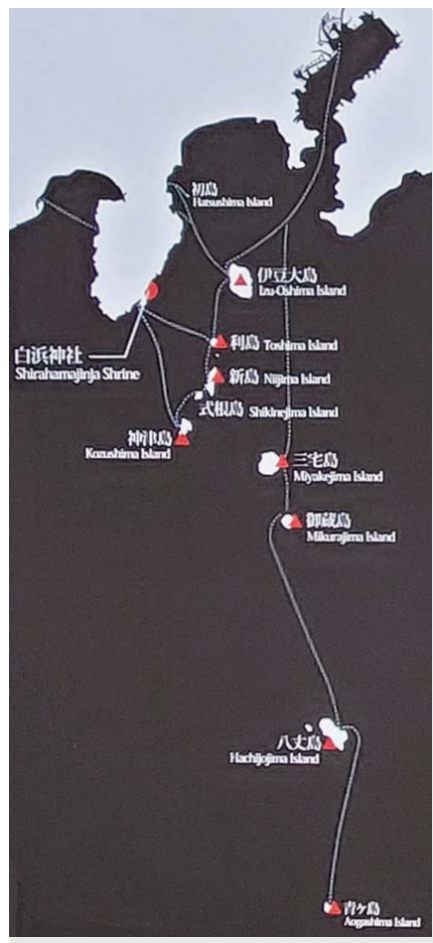


### 伊豆地方の神々の縁起

白浜神社の境内には、「伊豆の「島焼き」と白浜神社」と題した解説板があり、下田と火山島の位置が地図で示されている。写真左、樹齢二千年以上、枯れてから千三百年経つという御神木「薬師の柏樹」の洞には、薬師如来像が安置されている。古代の人々は、噴火を神のしわざと考えた。伊豆諸島のなりたちを語る『三宅記』は、下田にも残る。下の囲いはその本の内容の概略。古い島名を「澳島」とか、「沖島」といった八丈島では、「いなほ」という名の后が5人の王子を産んだ。

【写真上】白浜海岸。大明神岩の鳥居の先、大島が浮かぶ。薬師如来像が安置されている御神木「薬師のヒヤクシン」。その奥に見える建物は拝殿。本殿は丘の上にある。

下田の「三宅記」 天竺(インドの旧名)に生まれた王子(三嶋神)は…支那、高麗と渡り、孝安天皇元年に日本に到来する。そして富士山頂でまみえた神明に安住の地を請うと、富士山南部の地を与えられた。この地では狭かったので「島焼き」(造島)を行うこととしたが、その前に一度天竺に帰国する。再び渡来した際、丹波で出会った翁媪との会話の中で、自身の名が「三嶋大明神」であること、正体が薬師如来であることを知る。翁(天児屋根命)からは「タミの実」をもらい、翁媪の子の若宮・剣宮・見目を連れて伊豆に向かう。そして孝安天皇21年、多くの龍神・雷神達とともに「島焼き」を行い、7日7夜で10島を生み出した。その島々には自身の后を配置し、各后は王子達を産んだ。



### 古代の伊豆諸島は「三島郷」

701(大宝元)年、律令制で国郡制が施行されると、伊豆地方には3郡が置かれ、伊豆諸島は下田と同じ賀茂郡に含まれた。賀茂郡はさらに5郷に分かれた(伊豆諸島は「三島郷」)。伊豆諸島が「相模国」に含まれたというのは、八丈島内での歴史解釈の誤解のひとつ。相模国の島嶼は、江島、城ヶ島などだ。

伊豆国は、律令の法典『延喜式』(927年完成)に記載された由緒ある式内社(官社)が92座と多いことで知られる。特に賀茂郡は46座と突出し、このうち伊豆諸島に23座(八丈島は2座。現在の「優婆夷宝明神社」鎮座しているのは、噴火活動や伊豆ト部(祭祀を司る役人)の存在が連動するようだ。

## 黒潮にもまれ 航海造船術が発達

### 古代は東方海上交通の要所

3世紀後半から7世紀にかけての約400年は、畿内(現在の奈良・京都周辺)に成立した大和政権が、やがて全国を統一し、日本列島を未開から文明へ、大きく転換させていった時代だった。その頃、伊豆七島を含む南伊豆の様子はどのようなか。

『図説下田市史』(下田市教育委員会発行)はこう記し、次のようにのべている。「南伊豆は、運輸手段の大勢が陸上交通に移る明治中期まで、畿内と東日本をつなぐ海上交通の要衝だった。伊豆諸島を含む伊豆地方は、古くから海民の生活圏。黒潮にもまれ、すべての航海術のほか、高度な造船技術も培われ、伊豆手(式)と呼ばれる独特な船型を生み出したという。

### 近世の下田は海の関所

八丈島(宗福寺・長楽寺)、大島(潮音寺)、神津島(清響寺)、三宅島(大林寺)の5寺はいずれも徳川家の宗門の浄土宗で、下田の天院院海善寺の末寺だったことが、『伊豆七島調査』(宝暦3年1753年)などに記されている。「江戸時代は各島の任職が海善寺で修行していた」と聞いています。明治以後に島は東京教区に変わりましたが、先代までは下田へ毎年あいさつに見えていたそうです。こう語るののは、海善寺の安藤真雄・前任住(81)。

海善寺は、徳川家の菩提寺である芝・増上寺の末寺。静岡県東部ではたひとつ、2階建て楼門の設置が許可された寺で、楼門両脇の長押飾り4個は、ともに徳川の家紋の「葵」である。写真下。

下田在住の歴史学者、原秀三郎・静岡大学名誉教授から、海善寺に関する次の秘話を教えてもらった。「初代の住職は毎朝、下田富士に登って空を見た。

古代史学の第一人者 原秀三郎氏

1934(昭和9)年、静岡県下田市生まれ。静岡大学文学部史学専攻卒業。京都大学大学院で国史学専攻(同大文学博士)。静岡大、千葉大の教授を務め、現在は静岡大学名誉教授。『下田市史』編集委員長。主な著書に『日本古代国家史研究』『日本古代国家の起源と邪馬台国』『日本古代の木簡と荘園』『地域と王権の古代史学』など



海善寺の2階建て楼門。○内は、徳川家の「葵」の家紋を埋め込んだ長押飾り

### 伊豆を離れた伊豆諸島

八丈島では、老中、松平定信(8代将軍・徳川吉宗の孫)が揮毫し、杉田玄白証明の一文が刻まれた「源為朝三社神木額」(町文化財)が宗福寺に所蔵されているが、定信は1793(寛政5)年、海防見分のため伊豆を巡視している(『図説下田市史』の年表に記載)。「伊豆諸島を含む伊豆地方は、外国船の来航に備え、国家的戦略の中に配置されていた」と語る原氏は、海善寺とその末寺について「幕府から表には出ない密命を受け、現在の海上保安庁と同じ海防の任務を持っていた」とみている。

幕府は1854(嘉永7)年、下田と箱館(現在の北海道・函館)を開港し、米国の船に水や食糧の補給をすることを約束した。その後、ペリーが上陸し、1856(安政3)年には日本最初の領事館が玉泉寺に開かれ、米国総領事・ハリスが着任するなど、下田は日本外交の表舞台となる。明治入ると、伊豆諸島は「伊豆国」(現在の静岡県)から離れ、同11年、東京府に移管された。そして、古代から伊豆と共に紡がれた多くの伝統文化の伝承は途絶えた。